

学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第4号】
令和元年
7月22日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

「生きる力」について教えるために 教師が意識したいことを考える

教育監兼学校教育課長兼教育指導センター所長

勝俣 純

少し前に、老後の生活資金として二千万円の貯えが必要であるというニュースが世間を騒がせました。このニュースを聞いたとき、まず、わたしは、どんな条件の人が、何のために二千万円必要なのか…と疑問を持ちました。そして、自分は年金制度について、詳しく理解していたのか…と深く反省しました。

わたし自身、現在の年金制度では、六十歳から七十歳の間で、年金受給開始年齢を選

択できると知っている程度でした。少し調べてみると、六十歳からの受給では三割カット、受給開始標準年齢六五歳から一か月受給時期を繰り下げること、〇・七%ずつ受給額が増える、六八歳から受給すれば黒字になる…ということがわかりましたが、この試算の場合は何歳まで生きること想定しているのか…、年金の謎は深まるばかりです。もっと、年金制度について、詳しく教えてもらわないと「老後の

貯え二千万円」について、意見を持とうとさえできません。いずれにしても、人生八十年と言われた平成時代から、令和へと時代は移り、人生百年時代に突入し、その準備を日本の社会が始めているというのを意識しなければなりません。

この人生百年について、「学校教育」の視点から考えた場合、義務教育で子供にどのような力をつけることが「人生百年を生き抜いていく力」を育むことにつながるのか、この人生百年時代での視点から、新学習指導要領を読み解くことも大切であると考えます。

わたしたち教員は、もっと社会の趨勢に目を向ける必要があると思います。国際化が進んでいると言っているのに、どれくらいわたしたちは世界

の動きを理解しているのでしょうか。

一九七三年の第一次オイルショックの原因は、イスラエルとエジプト間で起こった中東戦争でした。一九七九年の第二次オイルショックは、アメリカとイランの国交断絶から始まりました。いずれも日本国内に大きな影響を及ぼし、なぜか、洗剤やトイレトーパー不足となりました。いま、起こっているアメリカとイランの対立は他人事ではありません。現在、実際に日本に入ってくる原油や天然ガスの八五%はホルムズ海峡経由だからです。

少子高齢化が進んでいる…、国際化が進んでいる…、情報化社会がより高度化している…こうした様々な事実を、教員が、一社会人として、いかに「自分事」としてとらえていくかが問われています。例えば、年金問題、国際情勢について知ること、世間にもっと目を向けることが、教員の「働き方改革」を進めていく出発点であり、「生きる力」を育む教育の第一歩と言えはるはず。

学校に行きたいと思っっている
子供を応援しています
教育相談員 勝又 弥生

学校に行きたいけれど、行けない。でも、勉強したい…そんな子供たちのために、図書館の一室をお借りして学習支援を行っています。

学校から連絡をいただき、本人と保護者と面談をしてから支援を始めます。

一回二時間の活動は、何をしたいかを自分で考えてもらっています。活動の終わりに、リラックスタイムを設けて、好きなことをする時間にしていきます。

Aさんは、昨年度はほとんど登校していませんでした。初めて会ったときから、「漢字を書いていないから書けなくなりました。」と意欲的でした。現在は主に数学を復習していますが、休憩もとらずに進めることもあるほどです。

Aさんはイラストが得意です。雑談の中で、友達が一緒に卓球部に入ろうと誘ってくれたこと、運動が苦手だから美術部に入ったこと、ポスター

を描きながら、こっそりイラストを描いていたことなどを話し始めました。そして、部活動の様子を楽しそうに教えてくれました。学校の話をするのは初めてだったので、楽しい思い出があったことを嬉しく思いました。

Bさんは、とても真面目です。家でも勉強しているそうです。一緒に、国語を学習しています。得意なことがないと話していたのですが、いろいろなことを話すうちに家庭科

が好きとわかりました。今は、刺繍で作品作りをしています。ある時、将来の夢を聞いたところ、学校で働きたいと答えました。学校に対して良い思いを持っていることがわかり、安心しました。

いろいろな理由で学校に行けなくなってしまう子供たちですが、心の中には学校のことを残っています。少しでも学校と結びついていけるように、微力ですが背を押していきたいと思っています。

教育センターだより 風薫る

子供が育つ授業

御殿場市教育指導センター室長 高橋 正彦

神山小学校の芹澤崇子学級の授業です。支援学級の交流行事の「なかよし夏祭り」で行う魚つりゲームで使う魚を作る生活単元の授業でした。

「個が自分の力を精一杯発揮すること」と「仲間と協力して活動すること」が巧みに構成されていました。三つの視点

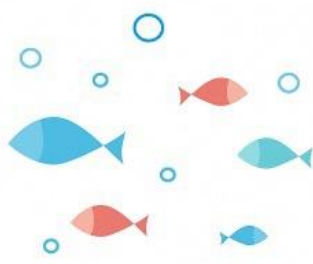
からまとめてみました。

教師の周到な計画と仕掛け

(1) 作る魚の形

魚釣りゲームの魚という、紙に魚を描いて、輪郭を切り取ることが多いものです。今回の魚は、ビニール袋に色つ

きの花紙を丸めて入れ、袋の外に模様を描いたり、目を貼り付けたりするものでした。制作のためにはいくつかの工程が必要です。子供にとって適度の困難さを伴うものでした。作る技術が上がると作品の仕上がりもよくなります。自分なりの工夫もできます。やりがいのある課題でした。



(2) 活動の見通しを

子供にも意識させる

子供に夏祭りまでのスケジュールをわかりやすく表示してあります。予備日も設けています。事前に、必要な魚の数をみんなで作成し、今日何匹作ればよいかも考えていました。魚釣りゲームの実現が自分の問題になっています。

また、授業の導入では、教師が子供一人一人の名前を挙げながら、前回の活動の様子や発言を話しました。単元を通

して、子供の思いがつながるようにしていました。
(3) 子供同士の個性を生かしたペア構成

一人ひとりの個性を踏まえてペアをつくり活動させることで、仲間と活動するという意識を持たせていました。

授業時の教師の役割は 子供同士をつなぐこと

必要な数の魚を作れるか、ゲームがうまくいくか心配をする子がいます。教師は「A君が心配なんだって」と皆に投げ掛けます。すると、「最初はみんなそうだから大丈夫」「できなくても子供だからいいんだよ」と、意見が次々出ます。心配性のA君が勇気づけられると共に、この活動に取り組む学級集団の考え方ができあがっていきます。

花紙が上手に採れなくて困っている子がいると、工夫をしている子に「困っている子がいるよ」と教師が声を掛けます。すると、その子が出かけていき、取り方を教えます。うまくできたと喜んでる子がいると、友達に見せにいく

ように促します。子供同士の関わり合いの場を教師が常に意識的に設定していました。

Bさんの学び

他との関わりが得意でないBさん。元気が良く天真爛漫なCさんとペアになります。活動の最中に「崇子先生、Cさんの(魚の)目がすごいことになっていきます」とうれしそうに伝えにきます。自分の魚ができた時には、担任に促され、別の子の所に行ってそれを見せます。仲間の中で自然に自分を表現する姿。確かな成長を感じました。

芹澤教諭が願う「育てる」教育という理念が、授業の中で具現化されていました。

